The Whisper from Amherst

エミリィのささやき

エミリィが生きていた頃のアマーストは、人口３千人余りの農業の町。当時はねずみや蠅（はえ）、へびやふくろうなどがずいぶんいたらしく、詩にもよく登場します。特に、ねずみには悩まされていたようです。

弁護士であった父親の影響もあってか、エミリィは「借家人、家賃、義務、拒否、法（律）」などと、法律用語を多用して、ねずみの存在の正しいことを立証しています。45歳頃の作品ですが、嫌われ者のねずみに対するエミリィの愛情たっぷりの弁護は、簡潔で、的（まと）を得ています。

‘The Rat is the concisest Tenant’

The Rat is the concisest Tenant.	鼠は 無駄口をきかない借家人
He pays no Rent.	家賃は払わない
Repudiates the Obligation —	その義務までも拒否する
On Schemes intent	そのくせ陰謀には無我夢中
Balking our Wit	鼠を探り 出し抜こうとする
To sound or circumvent —	人間の知恵の裏をかく
Hate cannot harm	口の重い敵だが
A Foe so reticent —	憎んでもしかたがない
Neither Decree prohibit him —	自然の調和にかなっているものを
Lawful as Equilibrium.	法で締め出すわけにはいかない

（思潮社「エミリ・ディキンスンを読む」岩田 典子　より）